

## 中学校国語科教科書における詩創作活動単元の内容と課題

横濱 嵩之

### 1. 本資料の目的と意義

本資料の目的は、現行の中学校国語科教科書における詩創作活動単元<sup>①</sup>の内容を一覧化し、課題を提示することである。

平成29年版学習指導要領（新学習指導要領）では、平成20年版学習指導要領と比較して、創作活動に関する記述と、創作対象として明示される文種数が増加した<sup>②</sup>。新学習指導要領の全面实施にともなって、今後は国語科教育における創作活動が活発になると考えられる。

一方、中井（2017）が、「学校現場において実践経験の少ない詩創作は明確な指導イメージが持てないという問題も顕在化している。」(p.89)と指摘するように、詩創作指導には課題がある。たとえば、佐倉（2001）は、国語科教育における詩創作指導の課題について次のように述べる。

全般的に見て、一部の熱心な指導者のクラスを除いて、児童詩の指導は低調である。教科書に詩の創作単元が出てきた時や学校行事、あるいは地域特集の締め切りに合わせて詩を書かせるなど、単発的な指導はなされているが、計画的、継続的に行われるケースは極めて少ないと思われる。つまり、詩を書く活動はなされていても、そこに指導がどれほどなされているのかと言うと、ほとんど経験とカンに頼っている、というのが実情であろう。(pp.10-11)

佐倉の指摘は小学校での詩創作指導についてであるが、この指摘は中学校での詩創作指導にも当てはまるだろう。佐倉は詩創作指導の課題として、「単発的な指導はなされているが、計画的、継続的に行われるケースは極めて少ない」ことを挙げ、「詩を書く活動はなされていても、そこに指導がどれほどなされているのかと言うと、ほとんど経験とカンに頼っている」と現状を批判している。

一方、「単発的な指導」の例として、「教科書に詩の創作単元が出てきた時」を挙げている。たしかに、詩創作指導に熱心でない指導者でも、教科書が設定した詩創作活動単元ならば実践する可能性は高い。教科書の詩創作活動単元を確認することで、詩創作指導の典型や現状の課題を明らかにできそうである。教科書の詩創作活動単元の先行研究には、中井（2017）がある。しかし、現行の小学校の教科書の分析であり、中学校の教科書の分析は行われていない。また、中学校の教科書における創作活動単元を分析した先行研究には、木本（2018）がある。しかし、主な分析対象は物語の創作活動単元であり、詩創作活動単元に関しては一部の教科書についての分析し

が行われていない。

したがって、本資料では、現行の中学校の教科書全5種類における詩創作活動単元の内容を一覧化し、課題を提示する。本資料の意義は2点ある。1点目は、内容を一覧化することで、出版社間の内容の差異を確認できる点である。詩創作活動単元を構想、実践する際の参考資料としての活用が期待できる。また、新学習指導要領に準拠した次期検定教科書の詩創作活動単元を相対化し、評価する資料にもなり得る。2点目は、内容を踏まえて現状の課題を提示することで、授業改善のための具体的な視点を提供できる点である。

## 2. 調査対象と調査方法

調査対象は、平成27年検定版の中学校の教科書全5種類（以下、出版社名を用いて、それぞれ①学校図書、②三省堂、③東京書籍、④教育出版、⑤光村図書と示す）である。

【調査Ⅰ】では、詩創作の方法や手順に言及していることを条件に詩創作活動単元を抽出し、全体の傾向について考察する。

【調査Ⅱ】では、内容を一覧化し、(1)教科書における詩創作活動単元の扱い、(2)紹介されている創作方法、(3)詩創作活動単元の特長、(4)詩創作活動単元の課題の4つの観点に基づいて考察する。

## 3. 【調査Ⅰ】の結果と考察

### 3.1 【調査Ⅰ】の結果

次ページの表1は、詩創作活動単元の抽出結果を整理したものである。上段に「教科書に示されている単元名」、中段に「教材として示された詩」、下段に「詩創作活動の概要」を記した。なお、比較のために短歌、俳句の創作活動単元も抽出した。●は詩創作活動単元を、△は短歌、俳句の創作活動単元を示している。

### 3.2 【調査Ⅰ】の考察

表1より、⑤光村図書を除く4社が詩創作活動単元を設定していることがわかる<sup>③</sup>。しかし、4社とも3年間を通して一度限りの設定であり、学年を越えて複数回設定されることはない<sup>④</sup>。また、詩、短歌、俳句の3種類の創作活動を網羅しているのは③東京書籍と④教育出版のみである。①学校図書は短歌、俳句、②三省堂は俳句、⑤光村図書は詩の創作活動単元が設定されていない。平成20年版学習指導要領には、第2学年「書くこと」に「ア表現の仕方を工夫して詩歌をつくったり、物語などを書いたりすること。」とある。このように、詩、短歌、俳句の3種類が「詩歌」とまとめて記述されていることが、出版社によって扱う文種に異同が発生する要因だと考えられる。

表1 平成27年検定版中学校国語科教科書における詩創作活動単元

	1年生	2年生	3年生
① 学 校 図 書		●書く1 想像することば 物語・詩を作る	
		谷川俊太郎「黄金の魚」	
		絵を見て思い浮かんだ 言葉を使って詩を作る。	
② 三 省 堂		●△書く：創作文 読みたくなるしくみを 工夫する	
		「思い出観覧車」 (書き下ろし教材)	
		これまで学んだ作品の 翻作をする。	
③ 東 京 書 籍	●書く〈詩歌創作〉 小さな発見を詩にしよう	△書く〈詩歌創作〉 短歌のリズムで表現 しよう	△書く〈詩歌創作〉 俳句を作って句会を 開こう
	「はこべ」ほか4篇 (書き下ろし教材)	短歌6首 (書き下ろし教材)	俳句5句 (書き下ろし教材)
	短文から、詩の技法を 用いて四行詩を書く。	短文から、音数に 合わせて短歌を作る。	・季語から内容を決める。 ・内容から季語を決める。
④ 教 育 出 版		●詩を作ってみよう (連想・想像による 新しいイメージ)	△短歌を 作ってみよう
		なし(参考:吉野弘 「虹の足」)	なし
		題名からイメージを 広げて詩に仕上げる。	感動や気づきを文 にして、短歌の形 にする。
⑤ 光 村 図 書		△短歌を創作しよう	△俳句を創作しよう
		なし	なし
		題材を考え、情景や自分 の思いを表現する。	題材を考え、情景や自分 の思いを表現する。

## 4. 【調査Ⅱ】の結果と考察

### 4.1 【調査Ⅱ】の結果

表2は、詩創作活動単元の内容を一覧化したものである。図版や例示された詩など省略した部分もあるが、創作過程を示す文章については全文を引用して示した。

表2 平成27年検定版中学校国語科教科書における詩創作活動単元の内容一覧

①学校図書2年生, pp.73-79	
単元名	「書く1 想像することば 物語・詩を作る」
リード文	絵を前にして感じることから、想像を膨らませて、物語や詩を作りましょう。
本文で示された詩創作の手順	
<p>詩を作る</p> <p>※クレー「黄金の魚」の図</p> <p>①絵を見て言葉を浮かべる</p> <p>上の絵（引用者注：クレー「黄金の魚」）を見て、どんな印象を受けますか。絵からイメージを膨らませて、今度は詩を作ってみましょう。上の絵をさまざまな角度から眺めて、感じる事、浮かんでくる言葉などを次の観点から書き出しましょう。</p> <p>①絵の雰囲気から受ける印象。 ②描かれているのは、どのような世界か。 ③この絵の世界の印象を別の世界（学校・世の中・人間・宇宙など）に重ね合わせ、共通するものや要素を探して結びつけたり、比較したりする。自分ならどの魚になるか考えてみるのもよい。 ④一度この絵から離れて、①～③で得た言葉をもとに、自由に文を並べる。</p> <p>②浮かんだ言葉を交流する。</p> <p>④で並べた文をお互いに読み合しましょう。</p> <p>③詩を読んで考える</p> <p>次の詩は、詩人の谷川俊太郎さんが、クレーの描いたこの絵に寄せたものです。あなたがこの絵から感じた印象（①で書き出した言葉や文）と比べてみましょう。そして、詩人は、この絵のどこを見ているのか、考えてみましょう。書いた詩は、友達と読み合しましょう。</p> <p>・この詩は、絵のどのような特徴を捉えているか。「おおきなさかな・ちゅうくらのさかな・ちいさなさかな・もっとちいさなさかな」「いのち・いけにえ」「しあわせ・ふしあわせ」「よろこび・なみだ」の対比は、絵のどのようなところを捉えた言葉か、考えてみよう。</p> <p>・この詩では表されていないと感じる部分があるか。</p> <p>④好きな絵を選んで詩を作る</p> <p>①の観点を使って、好きな絵をもとに詩を作りましょう。</p> <p>谷川俊太郎さんのように、好きな絵を選び、じっくり見つめて、浮かんでくる言葉を詩にしてみましょう。</p> <p>※谷川俊太郎「黄金の魚」全文</p>	

②三省堂2年生, pp.60-63

単元名 「書く 創作文 読みたくなるしくみを工夫する」

リード文

題名を聞いただけでもワクワクするお話。はじめの部分を読んだだけでもその先の展開が気になって、読むのがやめられなくなる小説。  
物語や小説は、読む人や聞く人の心をひきつけてやまない力をもっています。作品を書く側の立場に身を置いて、その秘密やしくみを活用しながら、実際に創作をしてみましょう。

本文で示された詩創作の手順

【目標】

「作品の魅力や特徴が効果的に伝わるように、描写や展開などを工夫して書く。」  
「作品を読み合い、表現の工夫やもとの作品の生かし方などについて意見を交流し、自分の考えを広げる。」

①創作コースを選ぶ

今までに学習した物語や小説などをもとに、創作活動を展開します。

創作のもとにする作品と創作コースを選びましょう。

【創作のもとにする作品例：（略）※詩では、谷川俊太郎「朝のリレー」などが掲載されている】

【創作コース例：A続編・前編、B番外編、C手紙、D詩／短歌、Eシナリオ、Fパロディー】

②作品を研究する

もとにする作品をいろいろな角度から分析します。

同じ作品を選んだ人が集まって、グループで研究するのも効果的です。

→ポイント確認（略）※「題名の工夫」「ストーリーの展開」など研究のポイントが8例紹介されている。

③創作する

(1) 構想を練る

研究したことを参考に、創作プランを立てます。

もとにする作品の魅力や特長を生かしつつ、自分の発想を盛り込み、読者をひきつける表現の工夫を考えます。

(2) どの部分を作るかを定める

作品全体を仕上げるのか、冒頭や途中のワンシーンなどの一つの場面に限って創作するのかを決めます。

(3) 執筆する

まず、下書きをします。

読者の視線で読み返して、わかりにくいところは修正し、より読者をひきつける表現に改良します。

修正が終わったら清書します。

④作品を発表する

作品はグループで読み合ったり、クラスで朗読会を開いたりして交流します。

もとなった作品の特徴が生かされているところや、新しく加えた発想や表現の工夫などを見つけ、楽しみましょう。

※本表では割愛するが、ページ下段には「作品集をつくろう」「学習を振り返る」についてのリード文がある。

【作品例：（本表では略）※Aコース～Dコースまでの作品例が掲載されている。】

③東京書籍1年生, pp.30-31	
単元名	「書く〈詩歌創作〉小さな発見を詩にしよう」
リード文	最近の体験や身近に見かけるものを題材に、四行くらいの詩を作ってみよう。反復や比喻などさまざまな表現の工夫も取り入れて、小さな発見をいきいきと伝える詩を仕上げよう。
本文で示された詩創作の手順	
<p>【目標】言葉を選び、表現を工夫して、詩を仕上げる。</p> <p>①詩の題材を見つける 最近体験したことや、身の回りで見かけるものなどで、詩にしてみたいと思うことを短い文にまとめてみよう。</p> <p>②想像を膨らませ、表現を工夫する 短い文をもとにして想像を膨らませ、思い描いたことを詩の下書きとして四行くらいで書いてみよう。詩では句読点（。や、）を使わなくてもよい。音読するときに切れ目になるところや、意味の切れ目になるところなどで、行を替えるようにしよう。 【短い文にまとめた例：「このあいだ、野原ではこべを摘んで持ち帰った。」】 【詩の下書きの例：「野原のはこべ／摘んで帰ろう／はこべやはこべ／白い花」→（引用者注：作者のコメント）「はこべという言葉を繰り返し使ってみたよ。」】 下書きができたなら、更に言葉を選び、表現を工夫して詩を仕上げよう。下書きをグループで読み合って意見を交換し、仕上げの参考にするのもよい。</p> <p>③清書して読み合う 詩ができたなら、題名を付けて清書しよう。清書したら、グループやクラスで、お互いの詩を読み合おう。書いたものを掲示したり、音読したりして発表するのもよい。それぞれの詩を読んで、表現の工夫や、発想の新鮮さなどについて、感想を述べ合おう。 【表現を工夫する：「はこべ」という言葉は「運ぶ」という言葉と似ているね。「はこべ」の他に、響きの似た言葉も詩の中に入れてみたらどうだろう。」】 【詩の完成例：「はこべ 野原のはこべ／こばこにいでて／はこべやはこべ／こべやへ運べ」】</p>	
④教育出版2年生, p.16	
単元名	「詩を作ってみよう（連想・想像による新しいイメージ）」
リード文	なし
本文で示された詩創作の手順	
<p>1詩の創作手順</p> <p>①人に見立てる比喻（擬人法）で題名を決める。（自然や無生物を擬人法で表現してみる） 例 波は手のひら、雨の恋、カーテンの悲しみ、消しゴムの夢、野球ボールの楽しみ</p> <p>②その言葉にじっくり立ち止まって連想や想像を広げ、新しいイメージを作り出す。 例 「波は手のひら」（題名）→連想・想像→打ち返すやわらかな波の動きは、まるで人の手が何かをなでているように見える（イメージ）→連想・想像→世界各地の海岸で、波の手のひらは優しく地球をなでている（新しいイメージ）</p> <p>③行変えや連の構成を工夫して詩に仕上げる。</p> <p>2詩を作ってみよう 同じ題名で作った詩であっても、人によってイメージは異なる。どんな作品に仕上がったか、話し合おう。</p>	

## 4.2 【調査Ⅱ】の考察

表2を基礎資料として、(1)教科書における詩創作活動単元の扱い、(2)紹介されている創作方法、(3)詩創作活動単元の特長、(4)詩創作活動単元の課題の4つの観点に基づいて考察する。4つの観点は、既述した中井(2017)や佐倉(2001)が指摘した課題を踏まえて筆者が設定した。

(1)は、詩創作活動単元の教科書における扱いを確認するために設定した。仮に、詩創作活動単元が「計画的、継続的に行われるケースは極めて少ない」という佐倉の指摘通りの扱いならば、今後は計画的、継続的な詩創作活動単元を構想することが求められるだろう。

(2)は、詩創作指導法にバリエーションがあるか確認するために設定した。佐倉が詩創作指導について「ほとんど経験とカンに頼っている」と批判したのは2001年のことである。(2)の観点で考察することで、現在の詩創作指導の実態と課題を知る手がかりが得られるだろう。

(3)、(4)は、詩創作活動単元の内容を評価するために設定した。中井が指摘するように、指導者が「明確な指導イメージが持てない」まま教科書の詩創作活動単元を指導しているとすれば、それぞれの詩創作活動単元の特長と課題を整理し、指導イメージを明確にするための具体的な視点を導くことは急務だろう。

### (1)教科書における詩創作活動単元の扱い

出版社によって詩創作活動単元の扱いに差がある。①学校図書、②三省堂、③東京書籍は、2ページ以上を割いて「書くこと」の単元として大きく扱っている。一方、④教育出版は、詩「虹の足」を教材とした「読むこと」の単元の発展教材としての扱いであり、半ページのみの掲載である。また、「書くこと」の単元として扱っている②三省堂、③東京書籍も、独立した単元ではなく、詩の鑑賞活動や詩に関する読み教材の後に位置付けている。さらに、【調査Ⅰ】の考察でも述べた通り、詩創作活動単元が学年を越えて複数回設定されることはなく、系統性が保障されているとは言い難い。

三浦(2010)は、短詩型文学の創作指導について、「国語科学習指導の中で、創作が教育課程にきちんと位置付けられるのではなく、『プラスアルファ』的に指導されてきた傾向は否定できない」(p.3)と指摘している。たしかに、現行の教科書における詩創作活動単元は、そのほとんどが「読むこと」の単元の発展的活動として扱われている。つまり、詩を書くことよりも詩を読むことの方が重点的に扱われているということである。詩を読んだ後に詩を書くという学習のサイクルは「計画的」な指導といえそうだが、置かれる重点に偏りがある現状こそ、詩創作活動単元が「単発的」になりがちな要因であろう。

### (2)紹介されている創作方法

出版社によって紹介されている創作方法が異なる。①学校図書は、絵を見て感じたことから詩を作る方法、②三省堂は短歌から詩へのリライト、③東京書籍は、短文に詩の表現技法を加えて

作る方法、④教育出版は、題名から詩を作る方法を紹介している。一方、指導者が一定の条件や型を与えることで詩創作指導を展開する、いわゆる「第三の世界」<sup>6)</sup>の詩創作指導法である点は共通している。さまざまな学力や背景をもつ教室の学習者全員に詩を作る体験を保障できる「第三の世界」の詩創作指導法が選択されるのは、検定教科書の使用目的に照らして納得のいくことである。このように、紹介されている創作方法のバリエーションの豊かさや、詩の創作過程の記述から、現在の詩創作指導は「ほとんど経験とカンに頼っている」とは言い難い。現行の教科書を用いれば、詩創作指導の質はある程度保障されるといってよいだろう。

一方、教科書が創作方法を1種類しか紹介しないことによる課題もある。それは、学習者が創作方法を自分で選択できないことである。たとえば、小学校と中学校を通して④教育出版を使用する学習者は、小学校3年生の詩創作活動単元「はっとしたことを詩に書こう」で、自分の心の動きを、表現を工夫して詩に書く経験をする。しかし、中学校では題名から連想して詩を作る方法を求められるため、小学校で学んだ方法を再度試すことが難しいのである。

### (3) 詩創作活動単元の特長

木本(2018)は、中学校の教科書の詩創作活動単元について、「題材をもとにイメージを広げること(発想法)と、様々な表現方法を選んで使うことの二つを内容とする教材が多い。」(p.98)と分析している。本資料では、前者を「発想・ことば重視」、後者を「表現技法・形式重視」として、それぞれの詩創作活動単元の特長を整理する。

①学校図書は「発想・ことば重視」に分類する。絵からイメージを膨らませる過程で、学習者とことばとの出会いを重視している点が特長だからである。中井(2011)は、絵画を用いた創作指導について、「絵画を用いた創作指導はそのほとんどが物語文の創作に焦点が当てられて」(p.52)いると指摘する<sup>6)</sup>。中井は、絵画を用いた物語文の創作指導では、時間の経過を意識させるために数枚の絵画を用いることが多いとしたうえで、詩創作指導で1枚の絵を用いることの意義を、「散文による創作文指導の際に重要視されるような時間的形式を取り払うことができ、「詩の形式に着目したものは違った、ことば表現の可能性そのものについて子どもたちが学ぶこと」(p.58)だとしている。本単元では、絵画「黄金の魚」1枚から「浮かんだ言葉」を並べて詩にする方法を紹介しており、詩の表現技法や形式の使用について言及していない。あくまでも、絵画を媒介とした学習者とことばとの出会いを重視しており、「詩の形式に着目したものは違った、ことば表現の可能性そのもの」を追究し得る単元である。

②三省堂は「表現技法・形式重視」に分類する。さまざまな文種間でリライトする点が特長だからである。本単元では、短歌を詩にリライトする活動が紹介されている。詩の創作過程で、短歌という他の文種を経由させることで、詩に特有の表現技法や形式に着目させることができる。この方法には、学習者が、詩を作りながら詩という文種を相対化できるという利点がある。

③東京書籍も「表現技法・形式重視」に分類する。散文に、詩に特有の表現技法や形式を加えることで詩を作らせる点が特長だからである。「はこべという言葉を繰り返し使ってみたよ。」「は



こべ』の他に、響きの似た言葉も詩の中に入れてみたらどうだろう。」など、他の出版社では抽象的な記述にとどまっている創作過程が具体的に示されており、学習者が自力で詩創作に取り組めるようになっている。また、pp. 245-246では「表現技法を使う」として、表現技法①（比喩〈直喩・隠喩〉・反復）・表現技法②（擬人法・省略・倒置・体言止め・対句）がまとめて紹介されており、関連資料として指導に用いることができる。「さまざまな表現技法を適切に使うことで、風景や感動を印象的に伝えるとともに、文のリズムをよくすることもできる。」としている。一方、「表現技法を使いすぎると、大げさになったり、意味が分かりにくくなったり」することもあるとし、「逆効果にならないように気をつけながら使う」ことを勧めている。

④教育出版は「発想・ことば重視」に分類する。題名という特定のことばを詩創作活動の起点にしている点が特長だからである。中井（2016）は、「チョコレートの駅」「ゴムの砂浜」など、2つの単語をランダムに組み合わせて作った題名を起点にした詩創作指導法を紹介し、「与えられた例や与えられた質問をそのままことば集めや詩創作のアイデアとして用いることができるような手立てとなっている」(p. 68) と評価している。本単元でも、詩「虹の足」の題名をヒントに、「消しゴムの夢」など比喩を用いた意外な組み合わせの題名から連想・想像を広げて詩の内容を決めていく方法を紹介している。学習者の自由な発想と、そこから得られる学習者自身のことばを重視していることがわかる。

#### （4）詩創作活動単元の課題

全体的に、創作過程の解説が不足しており、抽象的な記述にとどまっている傾向がある。

この傾向は、特に「発想・ことば重視」の詩創作活動単元に顕著である。①学校図書の「得た言葉をもとに、自由に文を並べる。」の「自由に」や、④教育出版の「行替えや連の構成を工夫して、詩に仕上げる。」の「工夫して」など、抽象的な指示が目立つ。また、絵や題名から思い浮かんだ言葉から作られた詩の完成例も示されていない。

「表現技法・形式重視」の詩創作活動単元でも、創作過程の解説の不足が目立つ。②三省堂は、作品研究の観点は示されているものの、短歌を詩にリライトする過程についての記述がない。

③東京書籍は、他の出版社に比べて創作過程の記述が具体的である。一方、既述した関連資料（pp. 245-246）では、「表現技法を使いすぎると、大げさになったり、意味が分かりにくくなったり」についての悪例が示されていないため、学習者にとっては、どのような使い方が「大げさ」で「意味が分かりにく」いのか判然としないだろう。

以上、4つの観点に基づいて、それぞれの詩創作活動単元を考察した。次ページの表3に、【調査Ⅱ】の考察結果を整理した。

表3 【調査Ⅱ】の考察結果

	①学校図書	②三省堂	③東京書籍	④教育出版	⑤光村図書
(1) 単元の 扱い	「書くこと」の単元	「書くこと」の単元	「書くこと」の単元	詩の読み教材の 発展教材	
(2) 創作 方法	絵を見て感じたこと から作る。	リライト (短歌→詩)	短文に詩の表現技法 を加えて作る。	題名から詩を作る。	
(3) 特長	「発想・ことば重視」 絵画を用いて、 ことば表現の可能性 を追究。	「表現技法・形式重視」 文種間のリライト で、詩に特有の表現 技法や形式に着目。	「表現技法・形式重視」 創作過程の具体的な 例示により、学習 者が自力で詩創作に 取り組める。	「発想・ことば重視」 題名を起点にして、 自由な発想と学習者 自身のことばを重 視。	
(4) 課題	・抽象的な指示。 ・完成例が示されて いない。	具体的な創作過程が 示されていない。	具体的な悪例が 示されていない。	・抽象的な指示。 ・完成例が示されて いない。	詩創作単元 が設定され ていない。

## 5. 本資料のまとめと今後の課題

本資料では、現行の中学校国語教科書における詩創作活動単元の内容を一覧化し、課題を提示することを目的として、【調査Ⅰ】および【調査Ⅱ】を行った。

本資料のまとめとして、今後の課題を3つ提示する。

1つ目は、詩創作活動単元が単発的、プラスアルファ的に指導されてしまう傾向である。これは、詩を書くことよりも詩を読むことの方に重点が置かれることに要因がある。限られた授業時数の中でこの偏りを克服するために、帯単元の有効活用や詩集の編纂など、計画的、継続的に詩創作活動単元を実施し、詩を書く機会を意識的に増やしていく必要がある。

2つ目は、学習者が創作方法を自分で選択できないことである。これは、教科書が創作方法を1種類しか紹介しないことに要因がある。一人ひとりの学習者にとって、自分の肌に合う創作方法は異なっているはずだ。小学校での学習経験を考慮しつつ、学習者が主体的に詩創作活動に取り組めるようにしたい。そのためには、創作方法の選択を学習者に委ねた詩創作活動単元をデザインする必要がある。

3つ目は、全体的に創作過程の解説が不足しており、抽象的な記述にとどまっている傾向である。一方、仮に創作過程が詳細に記述してあったとしても、学習者がその過程通りに詩を書くとは限らない。指導者には、学習者がそれぞれ異なった過程を経て詩を作るという前提に立って、創作過程をよく見取り、その学習者に合った助言を見極めて支援する姿勢が求められる。

国語科教育における詩創作指導を、より意義あるものにしていくために、以上の課題を克服できる詩創作活動単元を構想、実践していく必要がある。

## 付記

本稿は、筑波大学大学院教育研究科に提出した修士論文の一部に加筆修正を行ったものである。

## 参考・引用文献

- 木本一成（2018）「文学創作の教科書教材」『ことばの授業づくりハンドブック 中学校・高等学校 文学創作の学習指導・実践史をふまえて』, pp.82-99, 浜本純逸監修, 武藤清吾編
- 佐倉義信（2001）『児童詩創作指導の理論と実践に関する研究』兵庫教育大学大学院学位請求論文
- 中井悠加（2011）「絵画を用いた詩創作指導の意義：Michael & Peter Benton(1997)を中心に」『国語科教育』第70集, pp.52-59, 全国大学国語教育学会編
- 中井悠加（2016）「ワークショップ型詩創作指導による学びの形成—Arvon Foundationの取り組みの検討から—」『学校教育実践学研究』第22巻, pp.65-77, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター
- 中井悠加（2017）「小学校国語科における児童詩教育の課題と展望：歴史の変遷と教科書教材の検討から」『人間と文化1』, pp.89-96, 鳥根県立大学研究紀要
- 三浦和尚（2010）「本パネルディスカッションの意図」『国語科教育』第68集, pp.3-4, 全国大学国語教育学会編
- 弥吉菅一（1977）「山際先生の児童詩教育における創作指導の実践記録を手にして」『児童詩の世界』, pp.188-189, 山際鈴子著, くろしお出版

## 注

- (1) 本資料の範囲では、「詩」を、短歌や俳句を除いたものとして定義する。
- (2) 平成20年版学習指導要領には、「B書くこと」の言語活動例に、第2学年に「表現の仕方を工夫して、詩歌をつくったり物語などを書いたりすること。」とある。一方、平成29年版学習指導要領では、第1学年の言語活動例に「詩を創作したり随筆を書いたりするなど、感じたことや考えたことを書く活動。」、第2学年の言語活動例に「短歌や俳句、物語を創作するなど、感じたことや想像したことを書く活動。」となり、2学年にまたがっての記述となった。また、以上のように、文種の明示数は、「詩歌」「物語」の2種類から、「詩」「随筆」「短歌」「俳句」「物語」の5種類に増加した。
- (3) ⑤光村図書では、2年生の読み教材「新しい短歌のために」、3年生の読み教材「俳句の可能性」の発展教材として「短歌を創作しよう」「俳句を創作しよう」が設定されている。しかし、1年生の読み教材「詩の世界」には詩創作活動単元が設定されていない。詩に関する教

材としては、1年生に「さまざまな表現技法」(pp. 219-221)がある。「言葉の並べ方の工夫：体言止め・倒置・反復・対句・省略」「比喩（たとえ）：直喩・隠喩・擬人法」が紹介されており、それぞれの用例として詩の一部が引用されている。

- (4) 現行の小学校の教科書では、6年間を通して詩創作活動単元が複数回設定される場合がある。①学校図書と②三省堂が4回、③東京書籍が5回、④教育出版と⑤光村図書が2回設定されている（中井，2017，p. 93）。
- (5) 「第三の世界」は、児童詩の代表的な指導者である山際鈴子の一連の実践を、弥吉（1977）が評した言葉である。当時の詩創作指導の主流であった、生活体験を書かせることを軸にした「児童生活詩」と、想像力を重視して書かせることを重視した「主体的児童詩」のどちらでもなく、かつ両者の性格を持った指導法であるという意味が込められている。
- (6) ①学校図書でも、単元の前半では、絵画を用いた物語の創作活動が設定されている。